

海外の朝鮮資料事情について

板垣竜太（同志社大学）

ここ数年、朝鮮民主主義人民共和国（以下、「朝鮮」と略すことがある）に関連した資料収集を世界各地でおこなう機会に恵まれた。私が探してきたのは主に1940～60年代の刊行資料だ。本国のどこか（金日成綜合大学、人民大学習堂、社会科学院等）にはしっかり所蔵されているものと理解しているが、あったとしても私のような者にはアクセスが容易ではない。ただ、それ以外の地域も、「ここへ行けば全て揃う」というような場所はない。特に珍しい資料を探しているわけでもなく、当時発刊されていた単行本、雑誌、新聞などの基礎資料を見ただけなのだが、それでも世界各地に散在している。その都度、資料事情を知る人などに聞いたりして、試行錯誤しながら資料を探した。私は調査を終えるたびに資料調査メモを整理し、今度そこへ行くという研究者に参考用に提供してきた。以下、モスクワ（ロシア）、延辺（中国）、ワシントン DC（米国）の資料調査メモを圧縮、再整理して公表する（韓国にも北韓資料センターなどがあるが、本稿では省略）。なお、この事情はモスクワが2014年、延辺が2015年および2017年、ワシントン DC が2016年時点のものであるため、その後変わった部分もありうることをあらかじめ指摘しておきたい。

1. モスクワ

朝ソ間の関係は1940～50年代が最も緊密であり、それを反映してかモスクワでは1950年代の資料についてはなかなか揃いがよい（なお、私はモスクワにしか行ったことがないが、サンクトペテルブルクにもかなりの蔵書があることは分かっている）。モスクワで最初に行くべきは何とんでもロシア国立図書館（旧レーニン図書館）であり、そこにないものが外国文献図書館にある場合もある。それからロシア科学アカデミー東洋学研究所図書館も一見の価値がある。以下、その順番で論ずる。

1)ロシア国立図書館（Rossiyskaya Gosudarstvennaya Biblioteka）

今でも旧レーニン図書館という名称が通用する。モスクワで最も多くのまとまった朝鮮資料コレクションを有していると考えてよい。時期的には1950年代の資料が最も充実しており、1990年代以降は資料がほとんど入ってきていない。単行本の揃いもよいし、珍しい雑誌・新聞が結構ある。モスクワでは、まずここから調べ始めるのがよいだろう。

最寄り駅は1号線（赤）のBiblioteka Imeni Lenina。駅を出てすぐのところ（住所はVozdvizhenka, 3）に本館がある。はじめて来館した時には、本館の正面玄関の右側にある第2入口から入って、登録事務室で入館証を作る必要がある。ただしパスポートの他に、高等教育を修了した証明書（学位証明書）が必要なので、事前に準備しておかなければなら

らない。手数料は100ルーブルで、5年間有効のカードがもらえる。

朝鮮語資料は本館ではなく、地下道を渡って向かい側（クレムリン側）にある東洋文献センター（Tsentr Vostochnoy Literatury。住所はMokhovaya, 6）にある。朝鮮語担当のライブラリアンは高麗人3世の方だったが、私が行ったときには、別の職場でも働いており、週に2日しか出勤していなかった。事前に英語か朝鮮語でメールを送って、アポをとっておく方がよい（行きたい人は紹介するので、板垣まで一報されたい）。東洋文献センターの閲覧室は月～土曜の10～18時に開室していることになっているが、資料が請求できるのは15:30までだし、入口のガードマンやクロークのおばあさんの帰宅の都合上、17:45には退館した方がよい。入館したら、まずクロークにカバンを預け、カウンターで入館手続きをおこなう。

資料は、言語別にカード目録で整理されている。朝鮮語図書カードは単行本、雑誌、新聞に分けられ、それぞれ北朝鮮式のハンゲル順で並んでいる。単行本は、著者名およびタイトル順の目録と、ソ連時代の分野区分にもとづく分類目録の2種類がある。見たい本が決まっている場合は前者、分野別にどんな本があるか調べたい場合は後者を見るのがよい。オンライン・カタログは無いが、内部資料として、雑誌・新聞の目録がExcelで整理されている（必要な人には板垣が提供する）。新聞目録はかなり詳細である一方、雑誌はまだ整理の余地がある。私は資料を待つ時間などを利用して、人文科学系雑誌を中心にカードからより詳細な書誌情報を書き写すとともに、誤記を訂正した。

資料の請求は、カウンターに備置された資料請求票でおこなう。単行本であれば1冊につき1枚、雑誌・新聞であれば年度につき1枚の請求票の記入が必要となる。職員が朝鮮語を読めるわけではないので、請求記号を正確に記入することが最も重要だ。朝鮮語図書は、ほぼ全て「3B」（←キリル文字）からはじまる請求記号となっている。雑誌には「ж」、新聞には「r」の記号がついている。資料の分量等にもよるが、20分から最大1時間ぐらいの間で資料が到着する。特に何冊までしか同時に請求できないという決まりはないようだ。

資料は通常、カウンターのすぐ近くの閲覧室で閲覧する。ライブラリアンが来ているときには朝鮮語専門の閲覧室も使える。資料はほとんどマイクロフィルム化されておらず、新聞などでも現物を手にとって読めるのが嬉しい。資料の保存状態は良好で、朝鮮戦争中の紙質が悪いものでも綺麗に残っている。昼食等で一時外出する時には、カウンターに資料を預け、カードと用紙をもらって出る。

自分で資料をカメラ撮影したりスキャンしたりすることはできない。コピーは、複写したい箇所を付箋で表示すれば、東洋文献センターの職員がコピーしてくれる。A4サイズ1枚7ルーブルで、現金払いとなる。本館ではスキャン・サービスもあり、A4サイズ1枚10ルーブルだが、もっと大きなサイズの資料も複写できる。ただし通常の利用者は資料を館外に持ち出せないため、東洋文献センターの職員が協力してくれるときにのみ可能だ。

職員は本を持って専用の通路で本館に行き、利用者は一旦東洋文献センターを退館して本館に入館し、そちらで合流して一緒にコピー・センターに行く。ライブラリアンの協力を得られれば最も容易だ。USB メモリを預けて、料金は後払いとなるが、こちらはクレジット・カードも使える。かかる時間は分量と職員の忙しさによる。特急料金を払うと急いでくれる場合もある。

2)外国文献図書館 (Vserossiyskaya Gosudarstvennaya Biblioteka Inostrannoy Literatury)

さまざまな外国の図書が集積されており、旧東側諸国の文献については結構揃いがよいと言われている。朝鮮資料については、ロシア国立図書館ほどの分量は所蔵されていないが、同図書館では無かった資料がこちらで見つかる場合もあるので、行く価値が十分にある。

Nikoloyamskaya, 1 にあり、Taganskaya 駅 (5 号線・7 号線) から地図を見ながら歩いて行くのが最もシンプルだ。6・7 号線の Kitay-gorod 駅からトロリーバスに乗ると、図書館の目の前にまで行けるが、トロリーバスに乗るまでがなかなか難しい。なお、同じ建物の 4 階に国際交流基金 (Japan Foundation) のモスクワ日本文化センターがあるので、それを目印に行くのもよい (<http://www.jpfnw.ru/jp.html>)。

まず入って左側のカウンターで登録が必要だが、パスポートの他に顔写真が必要だ。顔写真が無ければ手持ちの写真をスキャンして複製してくれるが、臨時入館証を作って 2 階に上がり、職員にお願いしてだいたい待つことになるので、できれば持っていった方がよい。登録に際しては、まず自分で基本情報を端末に入力し、それからカウンターに行く。かなりシステム化されているように見えるが、最終的に渡されるのは職員が手で書いたカードをラミネートした入館証だ。

入館して 2 階に上がったら、右奥に行くとなくさんのカード目録が並んでいる。単行本は、東洋言語資料のなかの朝鮮語カードのボックスが 4 箱程度ある。雑誌・新聞もそれぞれカード目録がある。難点は、このカード目録が全てキリル文字で整理されていて、分類目録もないことだ。単行本はそれでもまだハングルが併記されているが、雑誌・新聞はキリル文字しか書かれていないので、探すのに少し手間がかかる。請求票も、ハングルの読めない職員を考慮するならば、著者名・書名を含めてキリル文字で記入するのが無難だ。請求記号は、カード左上に記載された一般的な記号以外に、カード右下 (裏面にあることもあるらしい) の数字も必要になるので、注意が必要だ。さらに困るのは、雑誌の場合も単行本と同様に 1 冊につき 1 枚ずつ請求票を記載しなければならないということで、何号分が合わせて製本されているか不明であるため、原則として 1 号ずつ請求票を作成しなければならないという点だ。あまりに面倒なので、今回、雑誌は閲覧しなかった。

資料請求票の記載に不備さえなければ、15 分ほどで本が出てくる。コピーは職員に依頼する。著作権に関する図書館内規にもとづき、原則として 1 回に資料の 15% しかコピーさ

せてもらえない。資料別に著作権が切れているかどうか判断するのは面倒なためか、機械的に全てこの規則が適用されると説明を受ける。ただ実際には、ここでもやはり例外がある。館内に3カ所コピーするところがあって、合わせれば45%程度のコピーができるし、日をあらためて申請すれば全巻コピーも可能だ。何よりも、職員の理解さえ得られれば全巻コピーを非公式に許可してくれる場合もあるので、説得次第というところか。

なお、図書館内にある書店には朝鮮関係の書籍も並んでおり、地域事情コーナーなどがあまり設けられていない市内の大型書店等で探すよりは、まずここで見るのが便利かと思われる。ただし現金のみしか扱っていない。

3) ロシア科学アカデミー東洋学研究所図書館 (Biblioteka Instituta Vostokovedeniya Rossiyskoy Akademii Nauk)

同研究所の附属図書館。東洋学研究所は、地下鉄7号線のKuznetskiyi Most駅が最寄り駅で、住所はRozhdestvenka, 12にある。図書館はその建物の2階に位置している。訪問するならば月曜か水曜に行く方がいいと聞いた。突然行って利用できるのかは不明だが、研究所員の紹介があれば間違いなくすぐに利用できる。

今回は時間がなくてカード目録をざっと見ただけで終わったが、南北朝鮮の文献をそれなりに揃えていることは分かった。カード目録自体は言語学者L. R. Kontsevich氏が整理したものであるため、正確だ。まず上記①・②と行って見て、無いものを探してみるというのがよいのではないかと思う。

なお、同研究所の3階には朝鮮・モンゴルの専門家が集結している。黄色い表紙の「ロシアの朝鮮研究、過去と現在」(Rossiyskoye Koreyevedeniye v Proshlom i Nastoyashchem) シリーズを全10巻まで刊行してきたが、特に第3巻《現代ロシアの朝鮮学》(Sovremennoye Rossiyskoye Koreyevedeniye) ではロシア内の朝鮮研究関連機関や研究者がよく整理されているので便利だ。

2. 延辺 (延吉)

中国は延辺と北京に朝鮮資料が多いが、北京の中国国家図書館のものはしっかり整理されておらず公開されておらず、現状、延辺朝鮮族自治州延吉市の方がよい。延吉では、延辺大学図書館と延辺州立図書館の2つが重要だ。

1) 延辺大学図書館

延辺大学は1949年に創立された自治州の中心的な大学だ。人文社会系の図書館は正門から入って、本部建物の手前の道を西に行くとある。図書館は、もともとあった東側の棟とあとから増築された西側の棟の2つの建物に分かれており、朝文の図書は西側にある。西側の棟には図書館の「南門」から入るのが便利だ。朝文の図書は、単行本が7階の「朝文

図書閲覧室」、雑誌が6階の「中朝過刊閲覧室」、新聞が1階の「報紙閲覧室」にそれぞれ配置されている。各閲覧室に入ることさえできれば、全て開架式で原本を手にとって見ることができ、便利だ。

さて、問題はその入館・閲覧の方法だ。館内に貼られていた「校外読者」用の規定によれば、学外者は身分証（パスポート等）を用意したうえで、2階の両棟の渡り廊下東側にある「弁公室」（办公室；統括部門）に行き、臨時閲覧証を発行してもらうことになっている。「文献使用費」（利用料）として、訪問1日当たり20元がかかる。より正確に言えば、100元をデポジットとして払い、利用終了時に利用料をそこから差し引いた分を返金してくれることになっている。以上が公式ルールだが、外国人の場合、誰かの紹介無しでは苦勞するという話を事前に聞いていたため、私はある方の紹介で図書館にアプローチした。実際、「誰がどんな資料をどのように利用するのか」ということをあらかじめ伝えておいた方が、ことはスムーズに進むようだ（かえって警戒される可能性もあるが）。職員は約3年で人事異動がしばしばあるため、せつかく職員と知り合いになって信用してもらったとしても、次来た時には別の部署に異動していたということもあるようだ。特に弁公室主任としっかり話をし、その許可が得られれば大抵のことはできる。

コピーはセルフサービスで、1枚0.4元だ。一応、著作権の関連でコピーは1冊の4分の1以内と注意されるが、必ずしも厳密にチェックしているわけではない。延辺大所蔵本の海賊版が韓国で出回ったりした経験が何度もあったため、1冊丸ごとのコピーを最も警戒しているようだった。カメラ撮影も原則不可だ。コピー機は少し古くて画質は悪く、A4のみに対応しているため、その点、やや不便だ。

7階の朝文図書閲覧室は、東側の列の南側に朝鮮のもの、東側の列の北側に中国朝鮮族のもの、西側の列に韓国ものが分類別に並んでいる。一般公開されている電子目録の検索でヒットする文献が少なく、カードや冊子の目録も見当たらず、さらには分類が必ずしも厳密でない。そのため、朝鮮書架を最初から最後まで1冊1冊探すのが結局最も効率的で、なおかつ思わぬ発見もある。さらには、中国朝鮮文書架や韓国書架にも朝鮮書籍が紛れ込んでいるケースもあるため、そちらも関連分野をチェックしておいた方が無難だ。ただし、どうやら職員のパソコン内には内部用の目録があるようで、ぜひともそれをもらいたいところだが…。また、あるはずの本が無いので職員に聞いたところ、奥の事務室から出てきた場合もあった。部分的には閉架的な場所に行っているものもあるようだ。

6階の雑誌閲覧室も、言語および発行地別に雑誌が並んでいる。雑誌は割に揃いがよく、珍しいナンバーを含むものでいえば、『勤勞者』『労働者』『朝鮮語研究』『歴史諸問題』『朝ソ文化』『朝鮮女性』などがある。

1階の新聞閲覧室は、現在、表向きは閉室している。最近の新聞はほぼデータベースで見られるため、閲覧室の必要がなくなってしまったのだという。現在は書庫機能に特化しており、その結果として職員も配置されていない。そのため新聞を閲覧するためには、ま

ずは担当者をお願いして鍵を開けてもらう必要がある。というか、閲覧の手続きが決まっておらず、インフォーマルに見せていただくしかない。その分、新聞原資料を一つ一つ確認できたのはよかった。『労働新聞』は1946.12、1947.5-12、1948.1、1949. 4-12、1950.1-10、1951.4-7,9-10〜と、初期の珍しい号が見られる。『民主朝鮮』は1949.2,4-12、1950.1-9、1953.3〜などがある。ただし、埃がひどいので、マスクや手袋があった方がよい。

2) 延辺図書館

延辺自治州立の図書館。1949年に開館し、1955年に延辺自治州図書館と命名された。「延辺図書館」(yán biān tú shū guǎn)が正式名称で館入口の看板にもそのように表示されているが、市民(というかタクシー運転手)には「州立図書館」(zhōu lì tú shū guǎn)と言った方が通じるようだ。2012年の自治州創立60周年に合わせて、新しい建物に移転した。州政務中心の南側に位置する5階建ての巨大な建築だ。蔵書は40万冊、うち朝鮮文のものは8万冊にのぼるといふ。開館時間は、夏季(5月2日〜10月5日)が8:30〜17:30、冬季(10月6日〜5月1日)は8:30〜16:30だ。原則365日開館だが、月曜のみは午前が閉まっている。外国人も1F南側のカウンターに行けば、パスポートだけで読者カード(読者卡)をすぐに作成することができる。朝鮮族が多く雇用されているので、どの部署に行ってもだいたい朝鮮語が通じる。職員は概してたいへん親切で、時間的余裕があるためか、いろいろ対応してくれた。私が見た延辺の公的地位にある職員は、みな朝早く出勤し、昼休みも1時間半〜2時間とたっぷりとり、夕方も早めに仕事を切り上げるので、できれば朝早く行くのがよい(これはどこでも同じ)。仕事の仕方はゆったりとしているので、スケジュールは余裕をもって立てるのが望ましい。

蔵書検索はホームページ(<http://218.27.205.12/opac/>)から可能だ。館内での検索は、端末の朝鮮語対応が貧弱でかえって使いにくい場合もあり、事前に調べて行った方がよい。

朝文資料は、2階北側の「朝鮮文閲覧室」と、2階南側の「地方文献閲覧室/特殊文献収蔵部」にある。朝鮮文閲覧室に並んでいるのは、1970年代年代以降の単行本だった。開架にあればコピー等が可能で、地元に住んでいれば貸し出しもできる。コピーは職員に依頼するスタイルで、1枚0.5元、仕事は丁寧だがやはりゆっくりしている。

残りの雑誌および1960年代以前の古い単行本は地方文献閲覧室/特殊文献収蔵にある。朝鮮雑誌は開架に並んでいるものがほぼ全てで、ところどころに1950年代以前のものも含まれていたが、さほど珍しいものはなかった。しかし、古い単行本はすばらしいコレクションだ。はじめて見る書籍も多い。ただし、現状ではコピーも撮影も不可ということで、閲覧のみ可能な状態だった(もっと職員と交渉すれば何とかかなったかもしれないが)。2015年にはデジタル化を進めていると聞いていたが、2017年時点では残念ながらそれも進められていなかった。中国朝鮮文についてはデジタル化事業が今も進められているとのことだが、朝鮮文献は何もしていないのだという。1940年代から文献がいろいろ揃っていて、開

架式で手に取って見るができるというのに、複製手段がゼロというのは、逆にストレスがたまる。中朝関係の悪化が何かしらの影響を及ぼしているのかもしれない。

新聞は5階南側の書庫に所蔵されているが、閲覧するためには3階にある情報相談室(信息咨询室)に行き、資料の申請内容と理由をノートに書き、許可を得なければならない。閲覧許可が得られると、相談室の職員と一緒に5階書庫に入って必要な新聞を探す。綺麗な移動式書架に、月単位で綴られた新聞の原資料が刊行物毎に年代順に積んであり、手袋をはめて(資料保存のためというよりはほこり対策としてだが)、直接取り出すことになる。重要な資料は、『労働新聞』1947年5~12月、1950年1-2, 4-9月と『民主朝鮮』1948年5-7, 9-10月(その次は1952年10-12月まで飛ぶ)だ(そのほか『教員新聞』1955-66年、『文学新聞』1958-66年もあり)。こちらはセルフ・コピーも可能で、カメラ撮影も可能とのことで、実際、個別ページについては何も許可無しに撮影が可能であった。資料の保存状態はかなりよく、1940年代のものであっても、開いているそばから崩れていくようなことは基本的にない。複製の自由度や資料状態からすると、『労働新聞』と『民主朝鮮』については、まず延辺図書館で調査をし、不足分を延辺大図書館で補充するという順序で調査するのがよいと思われる。

3. ワシントン DC

ロシアおよび中国が社会主義国間の同盟関係を通じて資料を収集してきたとするならば、アメリカ合衆国は朝鮮戦争および冷戦下の情報収集の一環として朝鮮資料を集積してきた。現在それらはワシントン DC に集められ、整理、公開されている。

1) 米国国立公文書館 (NARA) の鹵獲文書

朝鮮戦争の最中、米軍を主力とする国連軍・韓国軍は、情報収集のために、占領した朝鮮北部地域の内部資料を手当たり次第に鹵獲した。極東司令部軍事情報局の連合翻訳通訳部(ATIS)が、鹵獲資料のうち重要文書を選別し(選別鹵獲文書とよばれる)、翻訳した。残りの一般資料は米国の連邦記録保存センターに送られ、さらに米国国立公文書館(NARA)へと移管され、1977年に機密解除されて研究者らが使える資料となった。選別鹵獲資料も1990年以降は機密解除された。占領地の兵士らが資料を無差別に収集した結果、軍事・外交面にかぎらず、実に広範囲にわたる膨大な内部資料や刊行物が閲覧可能となった。皮肉なことに、戦時下の米軍の略奪行為が、今日の実証的な朝鮮研究の基盤となっている。

原資料を手にとって見られる公文書館であるため、閲覧の細かいルールが多い。また大量の資料が保管されていることもあって、見たい資料に辿りつくまでが一苦労だ。事前にしっかり調べたうえで行った方がよいし、日程も余裕をもって行った方がよい。なお鹵獲文書の一部は、韓国の国立中央図書館が電子化して「海外収集資料」としてインターネット公開しているし、国史編纂委員会にもマイクロフィルム(画質はよくない)がある。ど

れも膨大な資料のごく一部に過ぎないが、まずはこの2カ所で収集できるものを見たいうえで、残りをDCに見に行くという方がよいだろう。

NARA in DC は市内 (700 Pennsylvania Avenue, NW) にあるが、いわゆる鹵獲文書 Record Group 242 (RG 242) は郊外の「Archives II」とも呼ばれる The National Archives at College Park, Maryland に所蔵されている。メリーランドに宿泊施設がほとんど無いため、DC 市内にホテルを構えることになるが、そこから Archives II までの行き方は2通りある。①NARA in DC から出る職員向けシャトルバスに乗る方法で、平日 (月～金) の午前8時から午後5時まで毎正時出発で出ている。バス停はDC Archivesの東、7th Street 沿いにある。②地下鉄 (Metro) Green Line に乗って「College Park Metro」駅で下車し、そこから C-8 Metrobus に乗る (30分に1本ぐらいあり、所要時間は15分弱)。

初めての場合は、1階の入り口入ってすぐの部屋で Registration Card を作る。また、Reading Room に紙を持ち込む場合は、この場で持ち込み許可のスタンプを紙に押しってもらうことになるが、何かと面倒なので、必要情報はノート・パソコンに入れて行く方が楽だ。次に、地下1階のロッカー室へ。持ち込みが認められているもの*だけを持って、あとは全てロッカーにしまう。

* 鉛筆やシャープペンは○だが、ペンは×。許可スタンプの押された紙の資料は○だが、ノートは×。カメラ、三脚・撮影台、フラットベッド・スキャナ、パソコン、携帯 (スマホ) などは○だが、シートフィーダ付スキャナやフラッシュなどは×。財布は○だが、カバンやフォルダなど入れ物系は基本的に×。アウター・ウェアは×。

1階からカードを見せ、持ち物チェックを受けて入る。その後、見たい資料によって階が違うが、通常の紙媒体資料は2階に行く (写真は5階)。

まずすべきことは資料の申請だ。Research Consultation という部屋でおこなう。ファイル・ボックス (「container」が正式名称だが、単に「box」と言う場合が多い) を引き出してくることを「Pull」と呼んでいる。1日5回の「Pull Times」があり、この時間までに申請書を提出しておく必要がある。

申請に不可欠な情報は、Record Groups (RG) の番号と、その下位の Entry Number (英数字)、その下位の Container Number だ。鹵獲文書 RG 242 は、従来 Shipping Advice (SA) → Box Number → Item Number という階層構造で分類されていた (旧分類)。それ自体は、原資料にスタンプが押されていることもあって、消滅していない。しかし、1990年代の Archives II への移転にともない、NARA の規格化された形式で箱詰めしなおし、棚に配列しなおした (新分類)。そのため、うまく対応づけて、見たい資料の入ったボックスの在処を見つけないといけない。以下の2文献を読んで鹵獲文書の資料の分類構造を把握したうえで調査した方がよい。

旧分類: 方善柱, 「鹵獲 北韓筆寫文書 解題(1)」 『아시아문화』 창간호, 한림대학교 아시아문화연구소, 1986.

新分類：森善宣、「選別鹵獲文書」について『佐賀大学文化教育学部研究論文集』10(2), 2006.

申請プロセスについては、名札をつけたアドバイザーが懇切丁寧に教えてくれるが、作業の流れは次のとおり（より詳しい情報が必要な人には私が提供する）。①Entry No を探し（これは事前にオンライン目録を見ながらやっておいた方が効率的）、②資料の保管位置情報を探し（配架されている臙脂色の目録ファイル Hierarchical Reference Report by Group から見つける。Stack Area→Row→Compartment→Shelf という階層構造で保管されている）、③申請書（Reference Service Slip）に記入し（①②の情報が必要）、④申請し（スリップをアドバイザーに渡す）、⑤待ち（30～50分）、⑥Circulation カウンターでカートを引き渡される。ここまでで一仕事だ。

1台のカートには、通常サイズのボックスだと最大24個しか積むことができない。1度に机まで持って行けるのは1カートのみで、カートから取り出して机に置けるのは1回に1つのボックスのみ、そしてボックスから取り出して机に広げられるフォルダも1回に1つのアイテムのみというルールになっている。細かいルールが面倒だが、解放後数年間の原資料を手にとって見ることができ、時間が過ぎるのも忘れて思わず見入ってしまう。

資料は、写真撮影、スキャン、コピーなどができる。コピー担当の係員のいるカウンターにボックスを持って行って許可を得ると、スリップと小さい紙切れをくれる。スリップは機のライトのところにあるフォルダに差し込み、紙切れの方は写真を撮るときと一緒に写す。複製方法としては、スピードの速いフラットベッド・スキャナをがんばって持って行くか、撮影台を使ってデジカメで撮るのがよいだろう。遅いスキャナだといらいらするし、撮影台なしでカメラ撮影すると疲れる（ブレや歪みも生ずる）。

16:30を過ぎると退館の雰囲気になる。職員も17時きっかりに退社する人が多いためだ。Circulation カウンターにカートを戻すが、資料を完全に返却する場合は「return」、翌日以降も見るために保管しておいてもらう場合は「hold」という。土曜は「pull」できないので、前日までに「hold」しておいた資料だけ見ることができる（さらに土曜はカフェテリアも開いていないので、昼食を持参する必要がある）。

2) 議会図書館 (Library of Congress)

米国議会図書館のアジア課 (Asian Division) が保有する朝鮮コレクションは、特に朝鮮戦争以降の単行本・新聞・雑誌を今日にいたるまでかなり広く集めている。1950年代ではモスクワの旧レーニン図書館に負けるが、それ以降の時代にはおそらく最大のコレクションといえるだろう。オンライン目録 (<https://catalog.loc.gov/>) で、ハングルまたはそのローマ字転記による検索ができる。また、雑誌・新聞については、アジア課の特設ページで整理してくれている（末尾リンク）。検索時には、著者名・タイトルのローマ字表記のほか、Call No と LCCN という2系統の資料IDをメモしておく必要がある。

議会図書館は、連邦議会の東側に位置している。建物が3つあり、それぞれ Jefferson (LJ

と略記される)、Madison (LM)、Adams (LA) という。議事堂の向かいにある LJ は、古くからあるシンボリックな建物で、ツアー客も数多く訪れる。その南に位置する LM にはメインの機能が集中しており、最初に登録をする部屋もカフェテリアもこちらにある。それぞれの建物に入るには毎回セキュリティ・チェックを受ける必要がある。地上で移動すると、このチェックに加え、道路横断時の信号待ちもあって何かと面倒だ。そこで建物間を移動する場合には地下トンネルが便利だ。配線や配管が剥き出しになり、乱雑に物が置かれた内部の地下道で、構造もぐにゃぐにゃしているが、案内表示に従って行けば迷うことはない。

初めて議会図書館に行く場合は、Reader Registration をする必要がある。LM の 1 階、LM140 という部屋でおこなう。ウェブサイトから Pre-registration をやっておくと、その場で入力する手間が省ける。パスポートで本人確認をし、サインし、写真を撮影するだけなので、5 分もあればカードができる。

Asian Reading Room は LJ の方にある。場所は 1 階の LJ150 だが、少し分かりにくい場所にあった。Great Hall (一見の価値あり) の南側に伸びる廊下 (この装飾もすごい) を歩いて行くと、その先を左に曲がったところにある。Asian Reading Room の開室時間は平日 8:30 ~17:00。入り口のカウンターに司書 (librarian) が交替で座っている。どの言語担当の司書に当たるかは分からないが、朝鮮語担当と相談したい場合は呼び出してもらえばよい。最初にカードを出して、ノートに登録をする。

資料を申請してから届くまで 30 分~1 時間が平均だが、古い朝鮮資料は探すのに手間取る場合もある。申請方法は 2 種類。① Reading Room にある複写式のスリップに必要事項を書き込む。② ID カードを作ってしまうと、Online Catalog から資料を申請できる。資料によってはオンライン申請できないものもあるので (マイクロフィルムなど)、それは現地で申請するしかない。なお、注意が必要なのは「Stored offsite」とされた別置図書だ。1 日に 2 度しか配達がなく、できれば 1 日以上前にリクエストの方がよいだろう。カードが無い場合は、事前に担当司書にメールでリクエストしておけば取り寄せてくれる。

図書館に行って自ら複製をつくる場合は、コピー、スキャン、撮影といった方法で複製できる。著作権管理は自己責任原則で、図書館側が責任を負わない、トラブルが起きたらあなたのせいという考え方だが、おかげで貴重書に分類されていないかぎり、職員が複製を制限してくることはない。コピーの場合は有料で、スキャナを使う場合は無料だ。マイクロフィルムの場合、パソコンと接続されたリーダー機があり、USB メモリで複製を保存する。なお、「どの資料の、どこからどこまでを、どのような形式で複製したいか」ということがはっきりしている場合は、図書館に行かなくても複製をリクエストすることができる。ただしかなり高価なので、利用は、資料が特定でき、旅費よりも安く済みそうな場合に限る。

資料を使い終わったら return デスクに本を置けば、それで終わり。部屋を出るときにも、

職員にバイバイすれば終わり。極めてシンプルだ。

※実際に訪問しようという方は、連絡 (ritagaki@mail.doshisha.ac.jp) をくだされば、さらに詳しい情報をお伝えします。

所在地・ウェブサイト案内

モスクワ

ロシア国立図書館 東洋文献センター

所在地 : Moscow, Mokhovaya, 6-8

Web : <http://www.rsl.ru/>

外国文献図書館

所在地 : Moscow, Nikoloyamskaya, 1

Web : <http://www.libfl.ru/>

ロシア科学アカデミー 東洋学研究所図書館

所在地 : Moscow, Rozhdestvenka, 12

Web : <http://www.ivran.ru/>

延辺

延辺大学図書館

所在地 : 延吉市 公園路 977 号

Web : <http://www.lib.ybu.edu.cn/portal/index.jsp>

延辺図書館

所在地 : 延吉市 文化东街 399 号

Web (一般・朝文版) : <http://kr.ybilib.com.cn/>

Web (目録) : <http://218.27.205.12/opac/>

ワシントン DC

米国国立公文書館 (NARA)

所在地 (NARA in DC) : 700 Pennsylvania Avenue, NW, Washington, DC

所在地 (Archives II) : National Archives at College Park, 8601 Adelphi Road, College Park, MD

Web (一般) : <https://www.archives.gov/>

Web (目録) : <https://catalog.archives.gov/advancedsearch> [←RG に 242 と入れると大量にヒット]

議会図書館 (Library of Congress)

所在地 (Jefferson Building) : 10 First Street SE, Washington, DC

Web (一般) : <https://www.loc.gov/>

Web (アジア課特設目録) : <http://www.loc.gov/rr/asian/koreanserials/NorthKoreaSerial.php>



해 금 강

発行者 在日本朝鮮社会科学者協会京都支部理事会
住所 〒615—0041
京都市右京区西院南高田町 17
電話 075—313—6161
編集 社協京都会報第 19 号編集部
印刷 朝鮮大学校出版部 TEL042-341-1331
発刊日 2017 年 12 月 1 日